

Takeshi Kakehashi

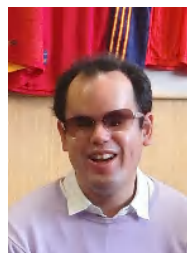
Official fan club

News letter No.18



ご挨拶と近況

梯 剛之



この会報が出るころは、平地でも各地紅葉真っ盛り、空気が澄んでキリッとした気持ちの良い時でしょう。

この半年のうち、4月の末から6月初めまで、僕は第二の故郷となっているオーストリアで2カ月近くを過ごしてきました。多くの音楽関係者の方々と交流させてもらい、緊張したり愉しかったり、音楽の輪の中でたいへん有意義な経験をしてきました。

今年12月に小松、来年2月には東京でも一緒にウルフガング・ダビッドさんのヴァイオリンとの共演が主目的でしたが、現地のこどもたちとも交流出来、リージングでの2回目となる「子どもに伝えるクラシック」の活動も継続出来たことは嬉しいことでした。

このオーストリアでの様々な経験・・・いくつかの場所での演奏、ヴァイオリンとの協演、オペラの鑑賞、多くの方々との交流、どれをとっても大事な経験で、この経験を自分の中で反芻しながら日々練習をし、演奏をして来ました。そんな中で、昨年11月の紀尾井ホールでのライブCDが音楽誌のレコード芸術誌上で特選盤に推薦されたことは嬉しいことでした。沢山の出会いや経験、それにこうした嬉しい出来事は、日々の新たな一歩に勇気と力を与えてくれます。

会員の皆さまの平和で豊かな毎日を祈り、演奏会でまた元気でお目にかかれるよう、これからも日々精進して行きたいと思います。



前回に引き続き、ギタリストの伊東福雄さんとの対談、後篇をお届け致します。

対談日：2014年1月12日（日） 場所：代々木 リンピック青少年センター

伊東 剛之さんはどういう人間になりたいの？（リストが作曲者、演奏者として多くのものを内包した大きな人、というくだり。その続きです）

梯 僕ですか？どっちかというところですね・・・芸術家としては、リストのような人間になりたいんですけど、普通の生活の中では、人と接する時は自分の負の部分あまり出さないように、特にチームワークでやっていくときは感情で物事を判断しないようにと思っているんです。ただ、芸術や思想の部分では思いっきり暴れたい・・・そこは分けて考えたいと思っています。

伊東 なるほど。そういうことに関連するのかなあ、小学校にDVDを配布するという・・・子供に伝えるクラシック、あのアイディアは湧き上がってくるものがあるんですか？

目次

Page 1

- ◆ご挨拶（梯 剛之）
- ◆対談（ギタリスト伊東福雄氏）

Page 2

Page 3

Page 4

Page 5

Page 6

- ◆オーストリア便り 梯孝則

- ◆サラエボ便り 梯孝則

Page 8

- ◆サラエボ便り 梯孝則

Page 9

- ◆子どもに伝えるクラシック
- ◆活動報告

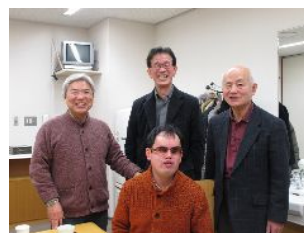
Page 10

Page 11

- ◆メディア報道

Page 12

- ◆事務局便り



伊東氏は、実は加藤会長のギター先生。対談後に。

梯 そうですね。僕自身、子供の頃、沢山遊んだという記憶と、基本的に子供の声が好きなんです。一方最近の日本のピアノの教育が・・・親戚の者も研究しているんですけど・・・如何に教科書的で教条的かというのが見えてきてしまって、日本のピアノ界、音楽教育への意識の低さを目の当たりに感じてしまって・・・



伊東 日本的な教育っていうと、もっと楽譜を見なさい、という教育・・・音楽より楽譜でしょう、みたいな言い方しますよね。

梯 楽譜を正確に認識することは必要なことです。音楽を最初から感情だけで演れというのは誤りだと思う。ただ、そこから後、日本の教育はその正確さだけで終わってガチガチに教科書通りになってしまっているように感じますね。本当はその先、どう泳がせて暴走させるかという教育が、音楽だけでなく、日本にはないですね。僕なんかは「右向け右！」と言われたら左向いちゃう、過激な言い方かもしれませんが、それが許される場面があってもいいんじゃないかと思っていますよ。



伊東 剛之さんは・・・反骨というか、そういう血を持っている？

梯 そうですねえ、それはあると思います。天邪鬼とも言いますけど（笑）ただいい子でいるというより、改革が好きですね。例えば、子供が自殺した、と聞けば、何か音楽でできないか？とか考えますねえ。じっとしていることが出来ない。嘆いているだけのことで嫌なんです。尤も自分も弱点でもあるんですけど、音楽のことで自分を追い込んでしまって精神的な均衡を保つのが難しかったことがあって、目標を達成しようとするあまり、その目標に囚われてしまってうまく行かないという経験はあったんです。

ただ基本的には僕は、馴染めない社会だったら、どういうふうにアピールしてどういうふうに脱却して馴染むように改革するか、という意識を持っていたと思います。

伊東 また話変わりますが、自分の最初の頃のCDは、聴かれますか？

梯 いや、聴かないですね。一回聞くと2、3年は聴かない・・・ということは10年聴かないということでもあります（笑）

伊東 それはやっぱり、過去は過去で、「今」の演奏を大切にしたいという意識からなのでしょうね。



梯 そうですねえ、聞くということは当時のことを思い出すということでもあります、苦しいこともありますから。過去のそれにいつまでも囚われていたくない、既に卒業している自分という意識を持っていたい・・・というか。

伊東 歳とるごとにハッピーになってきている感じ？

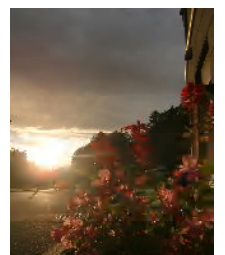
梯 そうですね。確かにハッピーになってきています。演奏家としては、若い時より、今が本当のスタートだと思えるようになりました。

伊東 それはいいことですよねえ。

梯 その前は練習に過ぎず、予行演習ではいっばいつまづいてきたり散々心身ともに痛めたから・・・今でも予行演習なんだろうとも思うんですけど・・・今からが本当のスタート、というのがほんとの感覚です。

伊東 常にそういうところがあります？つまり、10年前でもそう言っていた？

梯 その頃はそれはなかったと思います。ただ、芸術をやっていると、人が感じていないような





ずーっと先を見ようとするんですよね。例えばコンサートでも、お客様と同じ次元の会話をしているところから、次元の異なるところに行ってしまう状況になったり、凄く孤独で苦しいんですけど、やはり自分は急いで先へ先へと行きたいという感覚が強いんです。つまりイメージで言うところの事なんですね、わかってきている筈と思って後ろを振り向いたら「あれ、誰もいない、一緒にいたはずなのに、僕だけこんな高いところに来ちゃって・・・」という感じ。それに心細さがあったんですが、最近そのへんの距離が少しずつ縮まってきた。

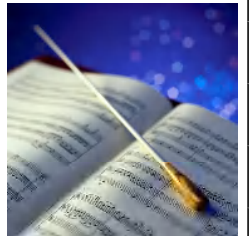
自分が行こうとしている速度を緩めているわけではないのですが、あんな差があったのに、あ、こんなところまで来てくれている！という安心を感じることがあります。自分はそれでももっと先に行つてまた人が見えなくなってしまうんですが、そのくらいのことをしないと満足しない自分が居て、一方では仲間外れでひとり疎外されるのは怖い、という感覚もあるものですから、常に自分の中のそういうところで戦っていますね。

伊東 そうというような音楽の話をする仲間はたくさんいますか？

梯 最近では少し音楽をやっている集まりに出るようになって、話はしますが、音楽家同士でも一方通行の話になってしまうことが多くて・・・。

伊東 案外、仲間内では音楽の話はあまりしないんですよね。

梯 ええ、俺の世界は俺の世界、立ち入るな、といった暗黙の緊張関係という音楽家同士のプライドみたいなものがあります。でも、この前ある演奏会で、そのあと演奏された方と話をしたんですが、演奏家って終わりが無いし、お客様の前で凄まじい緊張感の中で演る、というこの職業を選んじやったんだから僕たちはお互いあきらめないで頑張ろう、という逆にエールを貰いました。そうしたことは音楽家同士の連携を確かめることになるし、足を引っ張り合うのではなく同じ思いを経験している者同士が語らい、励まし合うという場が、必要だと思います。世界的に見てもそうですが、もっともっと演奏家同士の精神的団結力をもっと密にしなければいけないんじゃないか、と思うようになりました。



伊東 いろんな音楽家がいるけど、仕事だからやってる、という時もありますしね・・・。
でも剛之さんは強いんですよね。DVDプロジェクトなんかは自分にはない発想なので、強い人なんだなと思って・・・。



梯 これをやろうと思ったきっかけのひとつに、コンクールに優勝してすごいよね・・・といった音楽の捉え方・・・眼が見えなくて困難を克服したんだ、というところでどうも止まってしまっているんですね。僕が演奏家として伝えたいことは、作曲者はどんなだったんだろう、この曲が出来た背景は何だろうか、そこまででなくとも、絶望した時にどうしてこういう音楽が出来たんだろう、とか、魂という深い部分で共有したい・・・という想いがありましたね。

原始的な太鼓なんかは典型的で、そのへんの棒切れを持ってきて嬉しいときや悲しい時に“わあー”と叫んだところから本能的に太鼓を作っちゃうわけで。シューベルトなんか辛い時に菩提樹のしたで川のほとりで寝転んで傷ついた心を癒していたかもしれない、そうした意味で、芸術というものをもっと身近な部分で理解して欲しいと思うんです。ある意味で履歴社会に挑戦しなかった、数字で評価する社会にどうにも馴染めないんです。

それと今は、謂わば演奏者をブランドと同じにしてしまう傾向にあって、それに合わせていくと演奏家はどんどん死滅してしまう、という危機感を持ちました。これは次世代の子ども達を作るにはこの精神的な意識改革をしていかないと、音楽、芸術のあり方がダメになってしまうのではないかと、思ったことがきっかけです。

伊東 なるほど！素晴らしい。これは死ぬまで続くことですね。最近は何の楽器とのコラボも？

梯 ええ、最近バイオリンなどアンサンブルも好きになりました。もともと人と合わせるのは嫌いではないんです。ところがやっているうちに夫々の自己主張が出てきて、それが権力闘争みたいに発展してしまうことがある。コンツェルトのときなど、その時の指揮者の演奏楽曲の解釈がどうにも好きじゃない、と思うことがあって意見を言いたくなる、或いは、こうやって！と指揮されたことに納得が行かないという場合があって、うまく調整できない事があります。先輩後輩の壁、高名な指揮者の権威権力が音楽創りより優先する感じがすることがありましたね・・・。実際20歳という若い時でしたが、それなら一緒に出来ない！と指揮者の方とやってしまったことがあるんです。まだまだ駆け出しのひよっこでしたが、昔からそういうところがあります。

伊東 ほう、それは純粋だなあ。

梯 意見交換しながら創り上げていく本当の意味でのアンサンブルというのはとっても好きです。

伊東 でも名声が高まると、というか共演者のレベルが上がると、却って単純なハウス・ミュージックなんかは、やりにくいことがありますよね。

梯 そうなんですけど、団欒しながらのハウスミュージックはそれはそれでいいなあと思います。やっぱりソロの時はとても緊張するんですが、共演する場合は相手といい関係が出来ると相手との呼吸が合いながら、それをまた聴いてくださっているお客様と演奏者との対話が出来ると感じられるので、それはほんとうに嬉しいです。

そうした意味では、昨年から共演を始めたオーストリアのヴォルフガング・ダビッドさんは素晴らしい方で、音楽的にもとても合うので、いい音楽が出来ます。また今年も共演することになっているんです。（12月16日小松芸術劇場／2015年2月21日東京J Tホールが予定されています：事務局注）



2014.12予定。小松芸術劇場

伊東 ああーいいですねえ。ぜひいろんな方と演って欲しいですね。

梯 ゆくゆくは、夢ですけど・・・地球上のすべての国の方々と国境を超えたオーケストラを創ることができたら、と、そんな夢も持っています。

伊東 素晴らしい！剛之さんの運勢からすると夢は叶う、とありますから。実現するといいですね。

・・・この後6月22日、オーストリアから帰国して間もない梯さんと、もう一度対談の機会を設けました・・・

伊東 お帰りなさい。オーストリアは如何でしたか？

梯 今回はドナウ河の上流でグライフェンシュタインで命の洗濯をして来ました。主目的の演奏会とは別にホームコンサートも含めいくつかの演奏の機会がありましたが、良い空気の中でのんびりしました。ここは森の多いところですから、凄く沢山の歌う鳥たちが居て、それこそ天国の唄を聴くという感じで、とても癒されました。皆さんにお聞かせしたいくらいです。そんな中を散歩してベートーヴェンのシンフォニーのあのパッセージはこういうところで生まれて来たんだ、あ、ここでモーツァルトは曲想を得たんじゃないか、とか父と話しながら散歩したりで良い時間が過ごせました。



伊東 今回2カ月近くいらしたわけですが、何か再発見されたことがありますか？

梯 クラシックについて云えば、今回はオペラもピアノも演奏会に行く機会がだいぶ得られ演奏者として色々収穫がありました。ひとつは聴く側が（日本もそうなりつつありますが）自分なりのイメージとポリシーを持っていて、客同士で議論を戦わせている場面に出会い、その言っていることが、自分に突き刺さるように思えることがあって。日本の良い部分として、人前では配慮しながら個人的な批判や想いを語りますね。最初は日本人は分からなくてそうではないかと思っていましたが、最近は結構感想を言っている方がいる、ツウがいらっしゃると特にすぐに感想を言っていたり

・客席に居るとそんな話しが聞こえてくるので我が身に返して「怖い＝常に自分を律し精進して行かなければ」と思いますが、怖いと思う反面、これは演奏者にとってある意味やりがいがあるということでもあるわけで、改めて身の引き締まる思いをしてくれました。

同時に演奏家を見ていて、本当の勉強はお客様を前にした時にしか出来ない、と確認した思いです。勿論練習は当然勉強なんですけど、演奏者にとっても作曲家にとっても出来はライブにかかっていると思って良いわけです。演奏者としては作曲家と半分くらいは同じ精神状態を疑似体験的に共有することで、自分として理解して表現したいものがどこまで聴く方々に伝えられるか・・・の戦いの場でもありますね。

伊東 それは同じ演奏者として良く分かります。

時に梯さんは長調とか短調とかの好みはありますか？それとピアノの響きについてですが・・・

梯 昔は口短調が好きで結構こだわっていました。ピアノの場合、響く和音というのは、倍音が大きく関係するんだと思うんです。ウィーンでの調律師の方は低音の倍音を聴きながら調律していました。倍音ってどのくらい聴こえるものかという、ドの音に対して32の異なる音があるんですね。彼はそれを聴いている。併せて、音叉も使う訳ですから手でも感じているので、音そのものを耳と手、身体全部で聴き分けている調律師の方々は凄いと思います。

そのことで言えば、ショパンが「音には無限の周波数がある」と書いているんです。その中で人間の耳で知覚出来ない程の高い音、低い音がある、作曲は人間が聴いて不快にならない周波数の音を使わなくては行けない、と言っています。その記述からするとショパンというのは、一般に聴ける範囲を超えて聞こえていたのではないかなと思う。だから彼は短調にするか或いは長調で作るかというのを凄く意識していたと思います。

伊東 ショパンの頃もそうでしょうが、「音」の本質を見ていたという意味では、モーツァルトやショパンの頃のピアノは今とだいぶ違うでしょう。現代になると刺激の多い生活になって雑音も多い、音もスピーカーやアンプで大きな音を出すようになってきましたが、原点に帰るようなことはとても大事ですね。

梯 大事だと思います。やはり丁寧に作られた手造りのものって哲学が入っているという気がします。どんなものでも、すぐ手に入るものは飽きるし大事にされないでしょう？移動や制作にスピードはあっても、魂がついてこれないということがあるのではないのでしょうか。今の日本は、どこでも機械に取り巻かれすぎている気がします。もう少しアナログで良いのではないかな、機械文明に対して距離を置くことも重要ではないか、と向こうの暮らしをすると感じたりします。人間は長い年月如何に苦労しながら、ものを創り上げ自分たちのものにしてきたか、ということに思いを馳せると、生きることについても、それは一通りではなくて、噛みしめるように人生を過ごしていくことに意味があるのではないかな、今はそれがなおざりになっているのではないかと、ある意味、今の世のありように不安を感じたりします。



ザルツブルグのモーツァルト生家のピアノを弾く梯さん。（子どもに伝えるクラシックDVDより）

伊東 随分色々話が出来ました。最後になりますが、今後どんな風に演奏の道を進んで行きたい？

梯 先ほどの「噛みしめるように」という思いに通じるんですが、試行錯誤しながら練習を積み、この練習は苦しいんですが、本番の時は、いたずらも含めて何のものにも束縛されずに楽しむ心境で演奏する、そんな自由な境地に到達するくらいまで深くやりたいです。失敗したらそれを認められる自分でありたいし、一方では半分意地を張ることで前に進みたい。

芸術の究極の目的は、商品としての在り方ではなく、“心の底から自分が感動している”ことをお客様に伝えることなのだと思うんです。演奏家としては、満足出来た演奏が終わって挨拶している時にばたんと倒れて死ぬ、って理想ですねえ。

伊東 それは全く同感ですね。今回の対談は僕にとっても勉強になりました。有難うございました。今後の益々のご活躍を期待しています。（了）



今回は、今年4～6月にウィーンで演奏活動に同道された剛之さんのお父様、梯孝則さんから、滞在期間中折に触れ事務局に頂戴していた オーストリア便りを ごく一部と、7月にサラエボでの演奏に臨んでの通信を掲載させていただくことになりました。お人柄が滲み出るような文体で日常を語られ、読み手は時として吹き出してしまう、巧まらずして愉快、ほっこりの文章に、事務局としても是非会員の皆さまにご披露したい、とお願いし実現しました。（事務局）

§ オーストリア便り 5月19日

4日間降りつづいて、今朝起きてみたらようやく、青空なので、買い物に行けると喜んでます。買い物で困るのは言葉がわからない事で、先日は塩を買おうとして悪戦苦闘しました。砂糖とか小麦粉とか並んでいるコーナーは知っていたので、塩もそこにあるだろうと、樂觀していたら、あるのは砂糖だけでどうしても塩が見つかりません。店中、何度もぐるぐる回るのだけど、どうしても見つけれないので砂糖の前で通りがかりの店員にザルツ、ザルツ、と叫ぶのだけど、首をかしげて理解してもらえません。ザルツブルク、ザルツ、ザルツブルクブルク、ザルツ、と言っているとますます不審そうな顔をされます。終いには砂糖の前で、ジェスチャーで砂糖を嘗めた表情と塩を嘗めた表情をしようとしたのですがさすがにアホらしくなってそこで諦めて、一人また丹念に探し回りました。そうしたらなんと肉やの隣のコーナーにあったのです。探し物をするとき何度もカバンの中を探していて、ない、と思っていたらやはりカバンの中にあったというやつです。後でザルツで理解してもらえなかった話をしたら、ドイツではザルツと濁るけどウィーンではサルツと濁らないのだそうで、てんでわかってもらえなかった話でした。



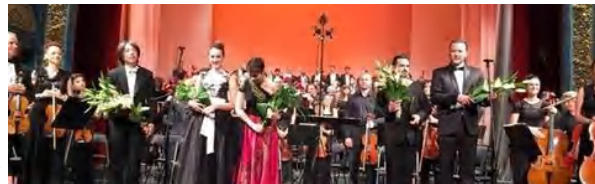
§ オーストリア便り 5月21日

ようやく快晴モードに入ったようで連日ウィーン晴れの日がつづいています。昨夜はウィーンの西部にあるクラウドさんのお宅でホームコンサートがありました。ハイリゲンシュタットを始発に地下鉄のU4はウィーンの中心を通ると西に向かいシェンブルンを経てヒュッテルドルフを終点とする路線ですが、終点の一つ手前の駅が最寄り駅でした。ウォルフガングさんと待ち合わせてバスに。バスはウィーンの例の5階建ての集合住宅が連なる町並みからウィーンの西の外れの小高い丘陵地帯に入ると突然樹木のあいだに一戸建ての家が点在する高級住宅街という様相になってその一軒がクラウドさんのお宅でした。クラウドさんはホームコンサートの準備に忙しいせいか我々をランニングシャツのまま出迎えすぐに庭のテラスに案内してくれました。暑いぐらいの日差しを避けるためにパラソルが立ててあってその下で早速飲み物をご馳走になりました。僕にはワンカップ大関を冷やしたものを持って来てくれてなによりの歓待でした。広い庭の先は高い樹木が隣の家の目かくしをしていてなんともいえない心地よい空間になっています。家の中ではせっせと今夜のコンサートの後のパーティーに供する食べ物の用意をしている女性がいて、奥様だろうと思っていたら、後で紹介されたら奥様は4年前になくなっていて、お嬢様だったことがわかりました。奥様は画家だったそうで描かれた絵が沢山飾ってありました。クラウドさんは僕と同年の70歳でした。80人が収容出来ると聞いていたので、昔の宮廷の大広間みたいな部屋を想像していたのですが、そうではなくて、ドアのない3つの部屋を通して使うのです。イメージは全然違いますが機能としては三部屋続きの和室の区切りの襖を全部開け放したという感じです。時間になったら満席で階段にクッションを敷いて聞く人もいました。一曲終わった時からブラボーが飛びかい、曲が進むにつれてクレッシェンドして大騒ぎでした。剛之も1910年作のベーゼンドルファーが大層気に入って、気持ち良く弾けたようです。演奏会後はパーティーになってそれぞれ思い思いの部屋に別れて遅くまで盛り上がっていました。庭には薪を燃やすストーブに火が入って楽しい雰囲気を出していました。いつも午前様になるようでウォルフガングを残して我々はそうそうに退散。月に2回のペースでやっているそうで、日本人はソプラノの勝本章子さんが歌ったことがあると言っていました。（オーストリアにて 梯孝則記）



2014年7月5日(日本時間6日)指揮者柳沢寿男氏率いる世界平和コンサートへの道～バルカン室内管弦楽団サラエボ公演「第九平和祈念コンサート」にてモーツァルト／ピアノ協奏曲第13番を演奏しました
梯さんは、ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボの国立劇場での平和祈念コンサートに招聘され、演奏により現地と日本の友好に資することができました。

今年はサラエボ事件からちょうど100年の節目にあたります。そこで、二度と世界対戦のない平和な世界を祈念して、一年前の8月11日から柳沢氏を中心とした「世界平和コンサート」プロジェクトが進行され、その集大成としてこの日、サラエボでの演奏が実現したそうです。(事務局)



§ サラエボ便り 7月3日(日本時間7月4日) サラエボ到着の日



剛之はサラエボに来ることを前々から念願していたので、ウィーンからの経由便がサラエボに近づく、「いよいよ実現したね」と興奮気味でした。

空港の建物から一步出ると高原に降り立つたようなひんやりと爽やかな空気が我々を包みました。夜の10時すぎだったので周りの景色は見えなかったのですが、出迎えの日本からの旅行業者の人の説明によるとサラエボは盆地状になっていて回りは森だということなので、空気が良かったのもうなずけます。

こちらに来る前からサラエボの伝統音楽を聴いてみたいと言っていたのですが、それを叶えてあげられないまま、こちらに来てしまいました。ホテルに向かうタクシーの中で現地の流行歌らしい曲が流れていたのですが、イスラム系

というか、アラブ系というか、そちらの方の音楽なのであらためてここが古代より東西文化の接点だったということを実感しました。

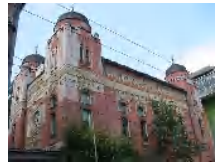
第1回目の事件はホテルについてすぐに発生しました。今回の音楽会のために合唱団や弦楽器の人やその他の関係者を含めて総勢90人の人が日本から移動して来ていて、そのほとんどがホテルボスニアに泊まっているということはタクシーの中で旅行会社の人に聞いていたのですが、いざチェックインしようとしたらホテルの手違いで「部屋が空いていない。ここより良いホテルを紹介するのでそこまでホテルの車で案内する」ということになってしまいました。ロビーで出迎えてくれた指揮者の柳沢氏も、どんなホテルか心配なのでついて行くと言ってきて、お疲れのところをわざわざそのホテルの部屋まで見にきてくれました。シャワーのお湯が出るかまで確認してくださり、部屋も「ホテルボスニアより綺麗だ」と安心して帰られました。

ウィーン空港では4時間の待ち時間がある経由便だったのでその時間に夕食を食べて20:15発のサラエボ行きの飛行機に乗ればちょうど良いと考えていたのですが、親子とも食い意地が張っていて飛行機で出る全ての食べ物を綺麗に平らげていたら、さすがに空港では食べる気にならず案内書で現地のレストランは深夜まで営業しているという一文を見つけて現地で食べることにしました。ホテルに荷物を置いてすぐに街に繰り出しました。ウィーンでいえばケルントナー通りみたいなこの街一番の賑やかな通り「バシチャルシア」がすぐ近くにあるのであたたかもお祭りのように、23時だというのに人が沢山出歩いていて嬉しくなりました。今日はラマダンという絶食の日だったので深夜になったら食事しても良いということでこんなに人が多かったのかもしれません。

ホテルを出る時は現地のお金に両替していないのでカードで決済すれば良いと思って出たのですが、店を選ぶころには周りのことに夢中でカード決済の確認もしないで店を選んでしまいました。料理

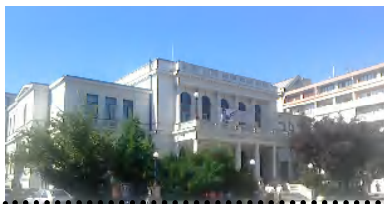


を食べ始めてからハタとその事に気づいて、とたんに食欲が減退。無銭飲食という言葉がちらつきだして半分も食べられません。そうとも知らず剛之は例の如く健舌ぶりを発揮してペロリとたいらげました。案の定、現金でないと駄目と言われて一瞬覚悟を決めたのですが、最後の頼みの綱のウィーンで両替しておいたユーロを出したら何のことはなくOKで事なきを得ました。相変わらずのチョンボをしています。



サラエボの町は宗教的な多様性で知られており、イスラム教、正教会、カトリック教会、ユダヤ教が何世紀にもわたって共存してきた町です。写真は夫々の特徴ある教会（事務局）

§ サラエボ便り 7月4日（日本時間5日） 演奏会前日



サラエボ国立劇場

今日は本番の会場でオーケストラとの練習がありました。

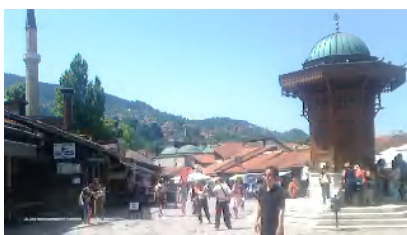
会場は国立劇場というのでつい日本の国立劇場を連想してしまいますが、行って見たら外見は日本の戦後すぐに建てられた市民会館風。中も市民会館風を予想して入ったら全く想像を裏切られて、いわゆるヨーロッパのオペラハウス仕様。ただ日本の仏像と同じで造られた当時は金箔が貼られ絢爛豪華だったであろうものの寄る年波には勝てず古びて、今はただ年月の蓄積がもたらす、深みで人を惹き付けていると言ったらいいでしょうか、ロビーも赤い絨毯が敷き詰められウィーン

のオペラ座とムジークヘラインを足して2で割ってそれを小さくしたような雰囲気でした。

約束された時間に現場に行くと第9の4楽章はすでに終わっていて、3楽章をやっていました。管楽器はオットツと思わせるところもありましたが、弦楽器はとても良い音で想像していたよりずっとレベルの高いオーケストラでした。ホールの音響も素晴らしく、良い音楽会になる予感がして嬉しくなりました。今回は柳澤氏から直接メールや電話で情報を得ていて、間にはいつものようにはマネージャーが入っていなかったのも、指慣らしをする時間があるかどうか心配だったのですが、案の定、全く楽器に触らないで長い道中からいきなり未知の楽器とオーケストラとに初対面という、今までに経験したことのないシビアな状況になりました。

今日は2時までしかオーケストラを押さえていないということは前日に聞かされていたので、3楽章が終わったら当然剛之の出番だろうと身構えたら1楽章が始まって、ようやく1時になって第9の練習が終わりしました。昨日の打ち合わせでは時間がないので休憩なしでモーツァルトに突入と聞かされていたので余計に心配だったのですが、ここで休憩が入って剛之の指慣らしと楽器との初対面の挨拶が出来、少しだけホッとしました。

楽器はスタインウェイのフルコンでした。明日まで調律が入らないということで酷い状態を覚悟していましたが思ったより良い音が出てホッとしました。ただモーツァルトを弾くには鍵盤が重かったようで盛んに弾き直しているのが心配になりました。



水飲みの塔の広場で

いよいよオーケストラとの初練習で、お互いに値踏みし合う時間でもあります。1楽章をサッと通して終わった瞬間オーケストラのメンバーの拍手とブラボーが飛び出しました。日本では全ての楽章の練習が終わった時に拍手が来るのは経験するのですが、1楽章を終わった段階での反応には感動しました。（サラエボにて 梯孝則記）

♥翌日のコンサートは満席のお客様。日本人と現地の複数の民族による混合合唱団が「歓喜の歌」に声を合わせ感動的で、梯さんも聴衆の大きな拍手のうちに無事演奏を終え友好に一役買いました。（事務局）♥



劇場内部／楽団との練習風景



子どもに伝えるクラシック 活動報告

本年度の活動実績と現在予定されている活動のご案内です。

♪2014年5月

オーストリア／リージング 小学校の生徒対象の演奏 with ウォルフガング さん
・・・詳細は次頁に。

♪2014年8月2日（ご招聘いただいて）

認定NPO法人アジア教育友好協会（略称：AEFA） 10周年記念行事
AEFAはインドシナ半島の主として山岳少数民族の教育支援を行うNPO法人です
・・・詳細は次頁に。

♪2014年8月31日（ご招聘いただいて）

福島県復興支援コンサート 於：郡山ポラリス保険看護学院メグレズホール



♪2014年9月16日

北海道士別市 市立士別中学校
・・・詳細は次頁に。

士別中学校 校長先生、教頭先生と

♥現在予定されている今後の任意団体活動♥

2014年12月15日（月）石川県小松市 今江小学校

※この翌日に小松芸術劇場うららホールで、ウォルフガングさんとのコンサートが開催されます



♥♥子どもに伝えるクラシック事務局より♥♥

HPが出来ました！ 自主活動の都度、動画をUPしています。

<http://classic-for-children.org/>

“子どもに伝えるクラシック”で検索！！

この活動は、主として学校や被災地でのコンサート活動を中心としております。梯さんご自身のピアノ演奏に、演奏家となるまでの生きてきた軌跡、演奏曲の作曲家とその生きた時代背景、人物像、作曲家の想いなどを語ります。そのスピーチを通し、梯さん人生にじかに触れることで、生きる勇気や感動を持っていただいたり、クラシック音楽をより識るきっかけとなったら、と願っています。会員の皆さまの母校やご関係先など、希望される学校がありましたら是非お気軽に下記事務局までご相談ください。

事務局 Mail: info@classicforchildren.org

HP上で活動資金へのご寄附呼びかけをしております。ご支援頂けましたら幸いです。

この活動は非営利任意団体です。

活動は梯剛之本人からの寄附、皆さまからの演奏・講演依頼と、ご支援としてのご寄付で成り立っております。ご支援のひとつの形として、コンサート会場、お振込によるご寄付を受け付けております。いただきましたご寄付は、交通費やHP更新など広報含め、実質活動経費として有効に使わせていただき、活動の都度、その活動内容を動画と共にHP上に報告致します。

【振込先 三井住友銀行 国立支店 普通預金 No. 8043907 名義：子供に伝えるクラシック 代表 梯剛之】

♪オーストリア／リージング 小学生対象のコンサート 5月

リージングの去年もやった勝手知ったるホールで、小学校の生徒を対象のコンサートが大成功のうちに終わりました。

曲目はまず剛之のソロでバラード三番、次にウォルフガングさんとのデュオでパガニーニ、ブラームス、ドボルザークの明日のコンサートでアンコール曲として弾く三曲をそれぞれ解説をいれながら弾き、その後質問コーナーになりました。想像したとおり、質問したいと手を挙げる子が続出して、20分間に10人ほどの質問に答えても、まだまだ手を挙げている子が雨後のタケノコのような様子でした。質問コーナーの後は最後にベートーヴェンのソナタ8番の終楽章を弾きました。

カーテンコールに答えて三回ほど出入りしてもまだ拍手がなりやまないの、ウォルフガングが昨年のアンコール曲のクライスラーの美しきロスマリンをやろうと提案してきて演奏したのですが、この曲はウォルフガングの十八番の曲なので、大ウケして、最前列の一年生と思われる子供たちから最後列の引率の先生までほとんど全員のスタンドオベーションの嵐になりました。

小さな子供たちのその姿を舞台袖から見たら熱いものがこみ上げて来ました。

子供に伝えるクラシックの活動を続けて行こうとしている剛之に明るい希望の光がさして来たように思われたからです。(梯孝則 記)



♪認定NPO法人アジア教育友好協会（略称：AEFA）10周年記念行事の中で演奏 8月2日



AEFAは、冒頭にもありますが、インドシナ半島にあるベトナム、ラオス、タイにおいて、行政の手が行きとどかない山岳少数民族の教育事業を推進している団体です。識字率が20%という山中で教育が喫緊の課題となっている地域における小学校、中学校、それに付帯する寮の建設、教諭の育成のための奨学金付与、寮生活を可能にするための野菜等食料作りの指導と資金提供など、建設する村民との連携の中で事業を推進してきた団体です。

AEFAには、梯さんもベートーヴェンDVD制作・配布の時期から、小学校の先生方へのアンケート調査へのアドバイスを貰ったり、HPにリンクを張って頂くなど、お手助けをいただけてきました。東北支援の一環として飯舘村の飯舘中学校が仮設校舎で新たな一歩を踏み出す時に、開校式典で演奏する切っ掛けをいただいたのもAEFAです。

この日は丁度、梯さんのお誕生日にあたっていて、サプライズでお祝いをいただき、それならば、と梯さんも10周年は新たな一歩、団体の誕生日、とお返し。梯さんのピアノと参加者全員で♪Happy Birthday to you♪を歌い、お互いの誕生日を祝いました。

♪北海道士別市 市立士別中学校での演奏 9月16日

梯さんのウィーン音大時代の後輩、北海道出身の稲田さんが、昨年の緑陽中学に引き続き、士別中学校をお手配下さいました。教育委員会の委員長や武山様、菊池校長、この活動とは別に士別市民ホールでコンサートを行いました。そのコンサート実行委員長の国忠りょう様と連携してこの活動となりました。牧歌的な地域、明るくて熱心な校長先生、気持ちのいい生徒さんたちと触れられて梯さん自身が癒されていたようです。梯さんの演奏には、食入様に手許を見ている生徒さんがいたり、一様に熱心に聴いていました。質問も10名以上から手が挙がり、翌日のコンサートがなければもっと気楽に冗談を交えながらも質問に応えられたろうに・・・と、そこがやや残念でした。この活動は地元新聞や、NHKからの映像取材がはいり、嬉しいことに夕方と夜8：45／10：00の3回、NHK地域ニュースになりました。



羊と雲の丘／360度パノラの絶景

PHOTO & NEWS GALLERY



音楽誌 レコード芸術 8月号誌上で、2013年11月28日紀尾井ホールでの演奏LIVE CDが特選盤に選ばれました。

事務局では、会員割引でこのCDをお分け致します。申込等詳細は次頁の事務局便りをご覧ください。

内容：ショパン／バラード全曲、リスト／ピアノ・ソナタ
リスト／コンソレーション第3番 ショパン／夜想曲第20番

道北日報

平成26年(2014年)9月18日(木曜日)



道北日報

平成26年(2014年)9月20日(土曜日)



豊かな音色で観衆を魅了
士別市 梯剛之さん迎えリサイタル

士別市 市民会館ホールでの演奏記事



5月オーストリアで
パーティッシュルに行き
ました。ザントフーリッ
ン教会にブルックナーが
眠っています。

【北斗新聞】【道北日報】

士別市 士別中学校での演奏記事

【道北日報】

士別市 市民会館ホールでの演奏記事



朝日新聞 山口県版 2014年7月28日

「天国」厚島を満喫 梯さん、自動らと海水浴(記事抜粋)

国内外で活躍する東京のピアニスト梯剛之さん(36)が27日、フランスの世界的ピアニストのアルフレッド・コルトー(1877~1962)が魅せられた下関市豊浦町の厚島(あつしま)を訪れた。コルトーを愛する梯さんは「念願がかなった。感無量です」と喜んだ。

梯さんはこの日、対岸の小串小学校の6年生13人と保護者らと共に漁船で渡った。澄んだ海に胸までつかったり、ウニやサザエなど獲れたての海の幸を味わったりした。スイカ割りも体験。普段は無人島だが、漁協や公民館など地域ぐるみで子どもたちの夏休み体験を支える。梯さんは「温かく受け入れてくれて、心にしみました」。

事務局便り



LIVE-CD情報

“2013紀尾井ホール・リサイタル” “2013JTホール・デュオ”
 ♥♥下記新盤CD 2作を会員価格で販売しています♥♥

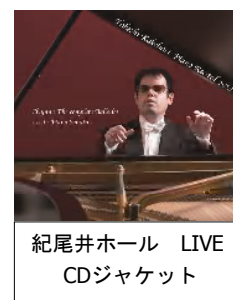
♪《梯 剛之 ピアノ・リサイタル2013》（レコード芸術特選盤）

2013年11月28日 紀尾井ホールライブ・レコーディング アンコール含め全曲収録

ライナーノーツ：野平多美

プロデューサー：金子哲理 エンジニア：馬場哲夫

【収録曲】ショパン：バラード全4曲／リスト：ピアノ・ソナタ／
 コンソレーション（慰め）第3番／ショパン：ノクターン 嬰ハ短調 遺作



♪ウォルフガング・ダヴィッド&梯剛之 デュオリサイタル2013

【収録曲】モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ 長調 K. 379

シューベルト：ヴァイオリン・ソナタ 長調 D. 574、

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第9番「クロイツェル」



♥いずれも定価2,400円を2,300円で販売中ですので事務局までお申込みください♥

CD本体に併せて振込用紙を同封して送付します。

E-mail: s100yamanaka@gem.hi-ho.ne.jp

FAX: 042-637-6489 (お名前、ご住所、電話番号を記載してください)



ファンクラブ懇親会の開催（東京）について

2月21日のJTアートホールでのコンサート後下記要領にて梯剛之さん、ウォルフガング・ダヴィットさんを囲んでの懇親会を開催しますのでご参加希望の方は事務局までお申込みください。

♥日時 2月21日PM5時頃より

♥場所 中華料理 黄鶴楼 03-3224-1537（JTホールと同一ビルの1階）

♥参加費 5000円/人（当日徴収）



事務局からのお願い

1. ご登録いただいている通信手段（パソコン、携帯の電話番号或いはアドレス）が変更になった方は事務局までお知らせください。
2. 事務局からのお知らせについて、携帯アドレスをご登録いただいている方の多くが容量オーバーで撥ねられています。別にパソコンをお持ちの方は、是非そのアドレスを事務局までご連絡をお願いします。

編集発行 2014年10月吉日

梯 剛之 オフィシャルファンクラブ事務局

事務局長 山中 重夫

〒192-0913 東京都八王子市北野台2-10-5

e-mail: s100yamanaka@gem.hi-ho.ne.jp

FAX 042-637-6489

協力：米沢信用金庫

NPO 子どもに伝えるクラシック



“子どもに伝えるクラシック”

<http://classic-for-children.org/>

梯剛之公式HPもご覧ください。

<http://kakehashi-takeshi.com/JA/index.html>